

松下幸之助記念志財団教員フェローシップ 授業実践報告書

1 調査での気づき

地道かつ精密な調査を震災直後から定期的に継続して行っていることに、まず驚きました。地元の方々と研究者の先生方の関係の深さも納得できました。海洋調査に参加し、舞根湾の穏やかさを実感した後、陸上調査で津波の到達域を知り、改めて津波被害の大きさを感じました。プランクトンや魚の種類から、海の生態系が震災後短期間で元に戻り、そのことが地元の漁師さんを勇気づけたことを聞き、自然環境と人間社会・科学とのつながりを考えました。

2 調査内容で得た知識を応用した授業実施の概要

生活文化に注目した東北地方の学習の最後に「森里川海が育む豊かな自然と東日本大震災」のテーマで授業を行った。導入では東北地方の豊かな自然環境と自然災害が人々の生活文化に与えた影響を振り返り、舞根湾周辺の地形について地図帳と調査で撮影した写真を基に確認した。展開1では東日本大震災当時の新聞記事と2年後の新聞記事を資料として提示し、気仙沼周辺の被害状況や人々の生活への影響を読み取った。展開2では舞根湾のカキ養殖家畠山さんの書籍と調査で撮影した写真を資料として提示し、調査で気づいたことや体験を話した。まとめとして、テーマに対する気づき・思い・考えを記入し共有した。

3 授業実施時の子どもたちの反応や感想

授業内の反応で大きかったのは、舞根の調査時に撮影した写真に対する反応である。海の様子や森の様子、一見ただの草むらに見える平地にももとは家が建っていたこと、現在の高台移転の様子など豊かな自然環境や東日本大震災による生活の変化を写真から読み取っていた。海の幸である牡蠣と山の結びつきの話に対しては、初めて知ったこととして感想に書いている生徒が多かった。また一部の生徒は10年という長い期間に渡って調査活動が行われていることから、自分達も継続して復興に関わっていききたいとの感想もあがった。

「東日本大震災がこんなに大きく被害をもたらした震災だったということを改めて学んだ。津波は怖いけれど、自然の豊かさや海の恵みは私たちの生活に欠かせないと思う。」「こんなにたくさんの大人が今でも調査活動をしていて、舞根の人たちと関わっていることはすごいことだと思う。」（感想の一部抜粋）

4 授業を実施してみた先生自身の感想

久しぶりに緊張しました。いつもは生徒の興味・関心を引き出すことに力を注ぎますが、今回は自分が興味・関心をもって追究していることから、姿勢を伝えることに全力を注ぎました。

5 ご自身の体験を語ることによる子どもたちの学びへの影響について一言

第一に、大人が学ぶ姿勢を見ることが、学ぶことは一生続くことなのだ・学ぶって楽しいことなのだという気付きにつながると嬉しく思います。第二に、教生徒が社会とのつながり・関わりに気付くきっかけになればと思います。これらの気付きが、自律的に学習する意欲や社会との関わりの中で成長しようとする態度につながっていくと考えるからです。

東日本大震災当時、梶原裕太くんの答辞に自分の使命を考えるきっかけをもらいました。以来「中学生の力」を社会に広め、活かすことが自分の使命だと信じて実践を行っています。特に、東京都区部の中学生は地域の方々と関わる機会が少なくなっています。授業を通して、人とのつながり・地域や社会とのつながりを感じる場をつくることで、社会の一員としての自分に自信をもち、自分も周りの人も幸せになるために行動する中学生が増える信じて取り組んでいます。

調査の様子

